



無意味は、今ここに存在している

私たちは時間をもっている。それはまさに人生のことだ。時間が尽きるまで、私たちは物語に出会い続ける。その断片が集まって世界はできている。ぜひこれを頭に浮かべながら、著者の語りの中を巡ってほしい。

本書は「紀伊国屋じんぶん大賞2016」を受賞している。社会学者として、人々の唯一無二の語りを聞き取っている著者。彼が日々考えている、社会、人、物語、つながり。これらの在り方や、そこにただ存在している無意味な「何か」について表現されたものが本書だ。私は読後、自分が出会った物語を振り返り、似た「何か」を探したくなかった。私たちも言葉にしたいとどこかで思っていたことが、ここでは語られている。

著者は多くの物語を近くも遠くもない、程よい距離から見ている。そして社会や私たちに向けて、その断片をそっと置いている。こ

うしてページは進んでいく。

タイトルに、社会学という言葉がある。私  
が本書を選んだのは社会学を専攻しているか  
らだ。しかし、ページをパラパラめくると無  
意味や孤独、断片といった教科書では見かけ  
ないような抽象的で独特な言葉がちりばめら  
れており、より興味をもった。堅苦しい内容  
を想像する人もいるだろうが、それは違う。

本書はどこにでも転がっている私たちの日常  
が舞台だ。そこから著者の考えがエッセイ風  
に語られているのだが、登場する人々から垣  
間見える人間らしさがとても愛らしい。かと  
思えば少しのホラーも感じる。温かさと奇妙  
さを同時に楽しむことができるのだ。まだま  
だ人生経験の少ない私には物語が時にフィク  
ションにさえ感じたが、すべてがノンフィク  
ションだ。私は夢中になって読んだ。

「手のひらに乗っていた小石はそれぞれか  
けがえのない、世界にひとつしかないものだ  
った。そしてそれが世界中の路上に無数に転

がっている」。著者ならではの静かに印象に残る文章だ。本書のテーマは「つながり」。人と人のつながりは想像しやすい。では、人とモノ、動物、現象のつながりは何か。この問いの答えは、幼少期に奇妙な癖として小石を拾い、よく眺めていたという著者の語りに含まれている。また、小石の在り方は私たちにも当てはまる。私たちはかけがえのない無意味な存在なのだ。そして、日常には「つながり」が溢れているからこそ、楽しくなる、助け合える。優しさや愛情が生まれる。これらを再確認できる場所が、ここにある。